



□巻頭言

熊本学園大学外国語学部教授
外国語学部長 赤井 恵子

たとえ一作品のみを論じる場合でも、その作家の全集を全巻読了する、これが自分に課している研究上のルールです。10年

ほど前、『太宰治全集』を1か月半で読了しました。そうする必要があったからですが、太宰のことばを滝のように浴びることになりました。その中には号泣するほど感動した作品もありました。仙台医専に留学中の周樹人

□■□学科の最新ニュース！□■□

東アジア学科の年内入試では、10月の総合型選抜で8名、11月の学校推薦型選抜で指定校制21名、一般公募9名、その他1名の入学が決まりました。前期日程の出願は1月6～26日です。

(のちの文豪魯迅)を描く『惜別』です。なぜそんなに感動したのか、今振り返ってみました。おそらく、文学研究に懐疑的になっていたその頃の私に、以下のようなことばが強く響いたのでしょう。医学から文芸への転身を決意した「周さん」の、「文芸が無ければ、この世の中は、すきまだらけです。文芸は、その不公平な空洞を、水が低きに流れるやうに自然に充溢させて行くのです」ということばです。

□朝鮮牛と「あか牛」

現在日本で消費される牛肉のうち、約60%はアメリカやオーストラリアからの輸入牛肉である。しかし、戦前には、朝鮮半島から大量の朝鮮牛が輸移入されていた事実についてはあまり広く知られていない。

日本では676年の天武天皇による「肉食禁止令」から明治まで、1200年にわたって肉食に対する禁忌・忌避が続いたという通説がある。しかしながら、近代まで日本で肉食が全くなかったというわけではなく、猪・鹿・兎などの狩猟獣肉は食されていた。一方、牛に関しては、あくまでも役用・厩肥生産用や運搬用の家畜であって、牛の肉を食べる機会は極めて限られていた。ところが、明治になると、牛肉食は文明開化の象徴とされ、牛鍋ブームが巻き起こるなど、一転して肉用としての需要が増大することになった。当時牛は肉専用ではなく、農家での使役期間を経たのち肉用に転用される役肉兼用として飼養されていた。そのため日露戦争(1904～05年)を機に、兵食缶詰(牛肉大和煮)の需要急増と軍馬徴発にともなう使役牛の代替導入が進むと、牛の慢性的な不足状態が予測される事態となった。そこで、注目されたのが朝鮮牛である。

朝鮮牛とは、朝鮮半島に生息する在来牛であり、中国の黄牛と同祖とされる茶褐色の赤牛である。朝鮮牛は、「性質温順にして体質強健、殊に持久力に富み、農家の役畜として最も理想的なものに近い」(『朝鮮の物産』朝鮮総督府、1927年)と、特に役牛として高い評価を受け

東アジア学科准教授 土井 浩嗣

た。朝鮮総督府も併合間もない1912年3月に訓令「畜牛改良増殖奨励ノ方針」を発し、朝鮮牛を米・綿花・蚕繭とならぶ重要農産品に位置づけるなど、その改良に努めた。その結果、朝鮮における牛飼養頭数は、1910年に約70万頭であったものが、1915年に135万頭、20年には149万頭へと順調に増加していった。こうして朝鮮からの朝鮮牛の輸移入は、日露戦後に本格化し、1915年のおよそ1万頭から1920年には6万頭、40年には8万頭にまで達した。日本内地の農家で飼養される朝鮮牛も1920年には20万頭を超え、乳牛を除けば実に6頭に1頭が朝鮮牛で占められることになったのである。

最後に、この朝鮮牛は、熊本の食生活とも決して無縁ではない。それというのも、熊本県の牛肉ブランド「くまもとあか牛」は、朝鮮牛の血を引く種であるからである。熊本県(肥後国)一円では昔から褐毛(あかげ)の牛が農耕・運搬用に飼養されていたが、これらは古くから朝鮮半島より輸入された牛が増殖したものとされる。この牛とスイス原産のシンメンタール種を交配して改良を進めたのが、熊本系褐毛(あかげ)和種である。同じ「和牛」に分類される霜降り肉が特徴的な黒毛和種とは異なり、「あか牛」は赤身が中心で脂肪分も適度で、私自身もスーパーでよく好んで購入する。このように、何気ない日々の生活の中にも九州と朝鮮半島のつながりはひそんでいるのである。

□「出張日記」に代えて

東アジア学科教授 申 明直

大学院に進学した 90 年代半ば、韓国のブルーカラーでも所謂「マイカーグループ」になれたほど韓国の貧困はある程度、解消されていた。しかし、喜んでばかりはいられなかった。それは、東アジアの多くの子どもたちが絶対貧困による児童労働に苦しんでいたからである。そこで、私は児童労働の現状を調べるため、ネパールを訪れた。生活に不便な田舎町を離れ、一人二人と人が集まって出来たカトマンズの市外バスターミナル付近に位置する「月がのぼる家」は、故郷を離れた子どもたちがせめて夜だけでもくつろいで眠りにつけるようにと作られたシェルターだった。そこで、私は子供たちに尋ねた。

「14 歳未満は働いてはいけないことを知っているのか」と。すると、子どもたちはこう問い返した。「私たちが仕事をしなければ、あなたが私たちを食わせてくれるのか」と。児童労働は絶対貧困の結果に過ぎないという子どもたちとの愚問賢答で、私は膝を打って悟った。児童労働を無条件、禁止する前に、その子たちの故郷が自立・自活できるようすべきだと。私が学生と一緒に学内にフェアトレードカフェを開いたのは、その子たちの答えを聞いて得た悟りのおかげである。現場を訪ねるべき理由は、そこに本を読んだだけでは見えない世界が存在するからである。

□東アジアのあれこれー鄭和とサイエンス・フィクション「西洋」

東アジア学科准教授 小笠原 淳

中国明代の航海家の鄭和（1371-1434）は、2万人超の規模からなる大船団を率いて、遠くはアフリカ東海岸に達する 7 回におよぶ大航海を行った。ヨーロッパによる大航海時代が始まる以前の 15 世紀前半のことである。鄭和の大航海を中国語では、「鄭和下西洋」（鄭和、西洋へ下る）と呼ぶ。当時、明代の艦隊の規模は世界でも突出したものだったが、彼らは自然科学の知識に乏しく、「天円地方」（天は丸く、地は平たい）という独自の宇宙観を信じていた。当然ながら、鄭和はその後に地球球体説を証明したコロンブスやマゼランのような野望を持ち合わせておらず、永楽帝の命を遂行することに忠実な官

僚であった。しかし、「もし」鄭和がアフリカ東海岸にとどまらずヨーロッパ大陸に到達し、さらにアメリカ新大陸を発見していたなら、この世界はどうなっていたのだろうか。歴史に「もし」はないが、こうした問いに答えることが、サイエンス・フィクションの絶好の題材となることがある。先日訳し終えた劉慈欣の短編「西洋」は、まさにこの「もし」に答えるものだった。そこに描かれていたのは、中国という大国に都合の良い理想郷ではなく、むしろ理想とは程遠い、大きな危機に瀕した世界であった。

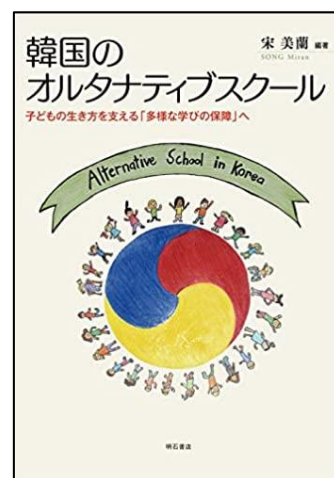
□新書紹介 宋美蘭『韓国のオルタナティブスクールー子どもの生き方を支える「多様な学びの保障」へ』

（明石書店、2021 年）

本書は、韓国のオルタナティブスクール（代案学校）の現状を紹介するとともに、代案学校が生まれた社会的背景や伸展の経緯を解説したものである。歴史的な解釈を加えつつ、根拠となる法制度や教育課程での具体的な制度の運用状況等を明らかにするパートと、事例報告を中心に都市部と農村部の取組みを取り上げ、教育理念等を検証するパートから構成される。韓国の代案学校は、不登校等の教育問題への対処のほか、国家主導による画一的・競争中心の学校教育に反対しながら、人と人が共に生きる新たな社会の創造を模索する社会運動としての歴史を持つが、最近では教育行政による認可校も増え、その広がりを見せている。

九州における公立夜間中学校の設置に関するニュースは記憶に新しいが、近年、日本でも公教育のあり方に関する議論が活発となっている。本書は多様な学びの保障の観点から、公教育の新しい形について、具体的な示唆を与えてくれる。

（東アジア学科特任准教授 金 美連）



■編集後記■

新型コロナウイルスの世界的流行がはじまりもなく 2 年となります。お互いマスク姿が当たり前の日常になったとはいえ、画面越しのオンラインではなく、直接向き合って話す大切さを改めて感じながら授業をしています。人と人との間にはデジタル信号に変換できない何かがあります。（ど）

発行者 熊本学園大学外国語学部東アジア学科

編集人 土井 浩嗣（東アジア学科長）

〒860 - 8680 熊本市中央区大江 2-5-1

Tel 096-364-5161（代表）